

鷗外森林太郎による獨逸語 NACHRICHTEN の 二つの翻譯語「情報」と「狀報」

3 K-1

大島 進
大島技術士事務所

1 譯述の下地

獨逸国留学四年帰日航海途上森林太郎26才「明治21年8月16日泊于哥倫坡観市逢釋興然于梵語学院来拜空王像」(暹東日乗)記し9月帰国。明治24年坪内逍遙と「没理想論争」交わり、没理想は没主観、没主観は没能感にして没感情すなわち没「情」なりの趣の「早稲田文学の没理想」明治24年12月「月草」誌の論が明治25年に及ぶ。此当時森林太郎30才本郷団子坂観潮樓に在る。下りて「明治31年3月20日高楠順次郎(大学梵文学講座)来り訪ふ梵文の事を談ず」(明治31年日記)とある。此頃半紙手筆書「塵屋」(梵文渡来記佛書覚書など)残す。此時代の父林太郎を森於菟は「佛蘭西語の学習や唯識論の聴講ばかりでなく多方面に勉強続ける」と回想(岩波鷗外全集著作篇第30巻昭和27年刊後記)。明治37年春上演歌舞伎脚本「日蓮上人辻説法」にて唯識般若典籍「金剛經」(核心が般若波羅密多心經)に係わる問答闘わす日蓮上人記述有り、逆上って明治20年11月9日ライプツチ滞在森林太郎は「今伯林東洋語学校の教官」井上哲次郎巽軒(大学印度哲学講座)と逢ひ巽軒「佛の大乗は因果を説く」と記しある(獨逸日記)。明治32年軍医部長森林太郎37才赴任地小倉第12師団に在り、師団司令部は師団長始め將校の「孫子」研究盛にしてまた森林太郎に「明治32年12月12日クラウゼキッツ戦論を偕行社にて講ぜしむ」とある(小倉日記)。(註)獨逸国留学時代暫々逢った井上哲次郎巽軒(素行会員)は「孫子諺義」(山鹿素行)明治44年刊行に叙ある。(東京都立中央図書館蔵)

2 譯述の定本底本

翻譯語「情報」「狀報」記述有る書籍は明治34年6月26日於小倉第12師団司令部石版刷 212丁和綴本クラウゼキッツ著森林太郎識「戦論」(日本近代文学館蔵)である。是は譯述の定本である。此「情報」「狀報」の譯出は獨逸語源字NACHRICHTEN からなされたが当NACHRICHTEN 記載する書籍即ち森林太郎識「戦論」譯述の底本は MARIE夫人序 CARL VON CLAUSEWITZ “VOM KRIEGE” BERLIN 1832(東京大学総合図書館鷗外文庫蔵)全3分冊魚け茶厚紙装丁本である。CARL VON CLAUSEWITZ は普魯西国大將にして兵書“UEBER DEN KRIEG”1810年起稿全10巻著述しあるが、此兵書の1832年ベルリン印刷本が先の鷗外文庫蔵“VOM KRIEGE”であり内表紙面に「明治21年1月校合鷗外逸人」の筆跡が薄く残りあり、森林太郎は“VOM KRIEGE”の巻一を甲、巻二を乙とする範囲を「戦論」として譯述したものである。此「戦論」は関係者のみへの配付本であった。世間一般公けには「門司新報」明治37年2月2日(初回)から5月に及び掲載有りて知られた。(北九州市立中央図書館蔵)(補記)明治36年11月5日刊陸軍士官学校譯「大戦学理」は佛蘭西語本「THEORIE de la GRANDE GUERRE」からの重譯本にして、森林太郎識「戦論」を第一巻第二巻として含む(文京区立鷗外記念本郷図書館蔵)。然し「戦論」語句に改訂施しある。例えば結果された敵行為の原因であるその動機つまり「動因」を単に「理由」にまた「狀報」を「情報」に替え「情況」の語文を改めた。

3 譯述の国語

坪内逍遙との「没理想」論争時に書かれた「早稲田文学の後没理想」(明治25年1月「月草」紙)に窺い知れる森林太郎の(翻譯)造語観は、「おほよそ造語はその既往の歴史を以て人の寛恕を得べき権利なきものなれば」解しがたき義に新に連ねた語を製し使わること不可にして「古今の哲学者審美学者が用ひなれたる」「語は矢張り用ひなれたる(常の)義に使わること止まざるべく」とするにある。「戦論」譯述の米歴(前記「大戦学理」本前文)に「予の之を譯するや、原文の義を咀嚼して而る後国語を以て之を出だし、其際一字一句妄りに増減すること無かりし」とされあり、CARL VON CLAUSEWITZ “VOM KRIEGE”譯述にても語を新に製せず矢張り我国既往の常の義の「国語」用ひたのが森林太郎の翻譯の在り方だったと解される。事実、譯述「戦論」文節乙(巻の二)戦の理論二章F節b項「理論は考察たるべし指教たる可からず」に於て、戦史(経験)への応用を介する戦考察の理論化が親昵の域に達すること十分なるときは(以下当該獨逸語源字抄本文) AUS DER OBJEKTIVEN GESTALT EINES WISSENS IN DIE SUBJEKTIVE EINES KOMMENS UBER; ...TALENTS とある此處の原著述に、森林太郎は印度哲学唯識説の術語「轉識得智」を看取ってその唯識論(天竺護法造唐玄奘漢譯「成唯識論」十巻本)の中の唯識認識哲学上の「常の義」の術語「所変」「能変」にて原著述源字を受け止め、「其知識の所変 OBJEKTIVEN 上形相は變じて能力の能変SUBJEKTIVE上形相となる」と譯出しある。ここで「轉識得智」は「妙觀察智を得ること」の意である。なお別に中国古代兵書「孫子」に用ひられある我国兵事分野の「常の義」の語「敵情」の譯述時使用が見受けられること後述する。

4 譯述の表現一般

兵事哲学者クラウゼキッツ原著述森林太郎譯述「戦論」定本はかなづかい片假名文にして「門司新報」掲載「戦論」また岩波鷗外全集翻譯篇第17巻「戦論」(昭和30年版)等は平假名文である。森林太郎譯述は原著述趣意浮き彫り施す明解かつ綺羅めく国語にて爲されある。例えば文節甲一B「定義」にて獨逸語源字 ZWECKから戦目的の義の「遠準」を ZIEL から戦作戦目標の義の「近準」を譯出せる国語に見れる如くに読者思维に遠近奥行き感思考を与え、また原著述文長文に当たっては記述各趣意毎に区分施し趣意示現する節項目名称抽出新設付与し原本論述構造見透し易く爲す等、原著者獨逸文論述深遠さを明白に和譯述したこと夙に知られる。

5 翻譯和語「情報」

譯述の底本 CARL VON CLAUSEWITZ “VOM KRIEGE” ERSTES BUCH ZWEITES BUCH の頁には、「遠準」「近準」「遺漏」「爲因爲果」「胆勇」などと譯語のための鉛筆添え書き散見多くまた譯文のための句区切り線挿入全文に及びあり、今獨逸語辞書片手の彼翻譯過程後追ひの手懸りになった。“VOM KRIEGE”に於けるクラウゼキッツ論述は文節甲一C「威力の究竟位」に看る闘の場に必在の二要素「敵對 FEINDSELIGEN の感情 GEFUHL」及びその「意図 ABSICHT」の

うち「後者（敵對の意図）を取りて立論」せられある。加えて後段文節甲三B「細論勇」にては戦者の戦遂行には智ばかりでなく情に支えられた機根に待つこと多いとする論述展開ある。この「情」に属する精神論看られるところに原著述の「方技兵法」の書に終わらない特質が窺い得る。森林太郎は此「立論」に即して原著述趣意充し伝える我が国語以て譯述を出だした。

我国既往の歴史上にて「情」は幽玄を微妙に感じ居る青く澄んだ心をさす語であり意識の主観的側面である能感作用の形（感じ居る姿形）を示現する義の語にして「情形」に通じている国語とされる。また感性あり感情が有る生き物を「有情」と呼び、他方兵事分野では戦国時代前より中国伝来兵書「孫子」記載の語句「情」は「敵之情」の義にして「孫子」(行軍篇七)記述文「無約而請和者」の情形は「謀也」と敵企図敵之情示現なるが「常の義」とされる(岩波文庫「孫子」金谷治譯注)。故に原著述譯述に際し森林太郎は文節甲一R「第二の理由は敵情を知ることの不完全なるに在り」に於ける獨逸語源字抄本 KRIEGERISCHEN AKT...NAMLICH DIE UNVOLLKOMMENE EINSICHT DES FALLES に看取れる敵行為の情形から「敵情を知ることの不完全」を譯述し、同文節の獨逸語源字抄本 DES GEGNERS NUR NACH UNGEWISSEN NACHRICHTEN に「孫子」(用間篇)記載文の抄本句「知敵之情反報也」の「報」の義に基づいて「不確實を免れざる情報」と譯述爲したと解せられる。是が獨逸語源字 NACHRICHTEN に対し兵書「孫子」研究の場に在った森林太郎が「知敵之情反報也」を「孫子」に識りて示現せる一つの翻譯語「情報」である。

(註)「情報」には問者の報せ「諜報」の意含む。
 (補記)「敵之情」を況う「情況」語の獨逸語源字抄本。〈文節甲一Y「戦は其動因の本質と其由りて生ずる所の情況とに従ひ」UMSTANDEN...DIE KRIEGE NACH DER NATUR IHRER MOTIVE UND DER VERHALTNISSE AUS DENEN SIE HERVORGEHEN, SEIN MUSSEN〉〈文節乙三B「敵の情況の全体を推測し」WELCHE AUF DEN GANZEN, DADURCH ERRATHENEN ZU STAND DES GEGNERS GERICHTET IST〉

6 翻譯和語「情報」

クラウゼキッツは「戦論」文節甲一Jにて「實世界の諸現象の授くる所の材料を使ひ推測の法に随」へば未来の敵企図敵之情をまさに推知し豫期できようことを説く。「戦を爲す者は敵の性格(戦闘力)の準備(軍隊行動の)状況 ZUSTANDE 及び諸關係 VERHALTNISSEN (の實相 WIRKLICHKEIT) に基き、推測の法 WAHRSCHEINLICHKEITS GESETZEN に従ひて其の(實相に)應に出づ可き所の者(敵企図敵之情)を知りて、以て我が應に爲す可き所の者(我處置)を定む」得べしと説く。論を進めて文節甲二A「戦の目的抽象戦の觀察」にては我が應に爲す可き(作戦計畫)處置のため「汎通の所変(客観物)」三物、(戦闘力土地敵意志)を挙げ、文節甲三C「局面眼果断」に至りて、戦は敵の應に出づ可き所の者の推測の善悪を原因にして其後の戦行為計畫處置の適否が結果される因果應報の境涯そのものとして「戦は推測の境界なり」DER KRIEG IST DAS GEBIET DER UNGEWISSEHEITと断じ、戦の行為は濃き淡き雲霧の中に在るが如しに其實相不確實の故にその不確實中より能く真なる敵之情を求め出さざる可からずなれど、真を缺く所、判断者により補ふることも掩えないこともあらん(唯識術語「有情総報」「有情別報」事象)と謂う。だからして缺く

新 門
 日五月三年七明治

報 新 門
 然然諸狀況として其不確實の度を加へしめ又事
 業の進歩を阻碍する者なり
 彼の諸狀況及び諸豫想の不確實と此の偶然の頻り
 に來るとは戦者をして常に其過よ所の其の期す
 る所に異なるを改せしむ

クラウゼ
 ツ氏 戦 論

陸軍少將 森林太郎君譯述

本論は森博士小倉在任の際第十二師團
 將校の爲りに翻譯せられたるものに係る

所あり加えて偶然頻りなる場での彼の敵性格戦闘力準備軍隊行動またそれら關係含むその全ての状を況い報せる諸「情報」NACHRICHTEN 及び我が豫期する敵應に出でんとする所の真の敵之情敵企図想像(推測)の諸「豫想」VORAUSSETZUNGEN は不確實で豫期相異は多からんと論ずる。

此各文節譯述に於て原著述の義を森林太郎は彼通曉せし唯識学にて咀嚼せること窺い看れると共に、交げし虚う認識の客観(所変)を負わせた語句としての翻譯語「情報」を先の翻譯語「情報」とは別に識れる譯述個所である。(註)唯識術語「有情総報」「有情別報」は語句「情報」の母語。〈関連〉文節乙5F「事後の判断は如何にして公平なることを得るか」。

(補記)「情報」「状況」獨逸語源字抄本。〈文節甲三C「局面眼果断」の「彼の諸狀況報及び諸豫想の不確實」と「JENE UNSICHERH

EIT ALLER NACHRICHTEN UND VORAUSSETZUNGEN〉〈文節乙二C f「基線」の「戦地と本国との間の通信の正確」UMSTANDEN...DIE SICHERHEIT SEINER NACHRICHTENVERBINDUNG MIT DEN BATERLANDE〉

7 翻譯和語の根本識

現象世界(法)の森羅万象(相)はただ(唯)人間深層の根本識のalaya 識現行するところの時に印象(客看)識また時に思量(主看)識と轉識する心作用としてのみ存在すると説く法相唯識論典「成唯識論」に於て、譯者玄奘は梵語源字 parinama (交げするもの)を二つの漢譯語「所変(客看)」「能変(主看)」に譯出分け爲し居り、此「所変」「能変」を森林太郎は識て彼「戦論」譯述時の獨逸語對 OBJEKTE と SUBJEKTE の譯語に充てると共に和漢語「報」の義の獨逸語源字 NACHRICHTEN 翻譯に際し敵之情推測の「所変(客体印象識)」である「情報」と推測の「能変(主体思量識)」である「情報」とに「戦者」心中の心作用の主客と轉識を看て譯出分け爲したと解する。(文節乙二F b)

8 翻譯和語の自用

假名遣調査委員と教科用図書調査委員兼ねる森林太郎序(明治41年)落合直文「日本大辞典言泉」に語句「情報」「情報」記載無いが、自作の短篇小説明治44年刊「藤輛繪」(三田文学)また長編新聞小説大正5年掲載「浪江抽斎」(その82)には軍隊指揮官への豫期せざる「情報」また飛脚が齎す戦場の「情報」として兵事背景場面に記述有る。同「浪江抽斎」一般場面には日常生活に用ひなれたる「常の義」の語「知らせ」「沙汰」「報」を用ひ居り、「情報」「情報」は軍人森林太郎にとっては敵之情「推測」得せしめ敵企図「推知」齎す兵事専門術語であった。(補記)語句「情報」記載有る一般国語辞典は明治44年刊「辭林」金澤庄三郎編纂に「事情のしらせ」と記載見られ、和語「情報」と英語 information との対向見るは英語辞典の昭和3年刊「芥藤和英大辞典」昭和6年刊「大英和辞典」(市川三喜ほか共編)にてである。

参考文献

- 1) 大島進 「語句「情報」の語源と本義」日本技術士会 会誌「技術士」No242 昭和64年1月
- 2) 大島進 「東洋の論理学「因明」と特性要因図の作法」日本科学技術連盟「品質管理」誌臨時増刊号 昭和63年11月